

「親愛なる寺田先生」展で高知を再訪

中谷宇吉郎雪の科学館友の会会長 神 田 健 三

高知県立文学館が、寺田寅彦没後80年を記念して「親愛なる寺田先生～師・寺田寅彦と中谷宇吉郎展～」(2015.12.5～16.1.31)を開催した。私は展示監修と記念講演及び雪氷実験教室の講師を依頼されて高知を再訪し(12.12～14滞在)、文学館の関係者はもちろん、講演会や実験教室の参加者、特に寺田寅彦記念館友の会の人達と親しく交流することができた。

■ 展示の監修

今回の展示は、3年前、宇吉郎没後50年(2012)を記念して雪の科学館が行った「中谷宇吉郎と寺田寅彦」展の内容を再構成する方針で行われた。2012年には文学館から寅彦関係の資料をお借りしたが、今回はその逆のかたちになった。文学館で展示を担当した永橋学芸員とは、2012年の資料借用の時から交流してきたこともあり、展示の構成などで率直に意見交換することができた。尚、2つの展覧会の中の3年間に「中谷宇吉郎の森羅万象帖展」(LIXIL 2013)、札幌国際芸術祭、世界結晶年(2014)があり、それらに関与してわかった内容も生かすようにした。≪2012年の展示については「榎66号」を参照。但し、その2頁下段の囲み記事内の3. 牧野富太郎筆のレリーフが作られた日付が11.8とあるのは誤りで、正しくは11.28。≫

又、宇吉郎の弟・中谷治宇二郎が小松中学時代に書いた「独創者の喜び」が、展覧会の直前に発見された。長く行方不明だったが、芥川に高く評価された作品である。そこで急遽、複写により展示することにした。寺田家の関係者からは、宇吉郎が関四郎氏に贈った墨絵が提供され、文学館で展示した後、雪の科学館に寄贈された。

この文学館は、いろいろなジャンルとのコラボにも積極的で、寅彦の随筆「病院の夜明けの物音」からの着想によるベッドのアート作品(mamoru作)も展示され、静謐な一角をなしていた。



高知県立文学館。右側が入口



「天災は忘れられたる頃来る」など2人の名言の垂幕

■ 記念講演で(12月12日)

題は「寅彦と宇吉郎—師弟の交流—」とした。宇吉郎は寅彦の薫陶を受けて実験物理の道に進み、

芸術や生き方まで、寅彦から良い影響を受けた。「ねえ、ふしぎだと思いませんか」、「大切なのは、役に立つことだよ」など、寅彦から教わった言葉や考え方を、宇吉郎は門下生に語り継ぎ、寅彦の没後は追想を沢山の随筆にまとめた。寅彦への敬愛は生涯続いたが、宇吉郎の没後も、師弟が呼応するかのような微笑ましい状況ができています。2人の名言、文化人切手、画集、随筆集、小惑星など、対をなすような話題が続いてきた。師弟の交流を背景にした「寅彦の高知」と「宇吉郎の加賀」を意識した人達の交流は、雪の科学館ができた頃に始まった。1995年に高知から寅彦記念館友の会の20名が雪の科学館に来訪し、2005年には雪の科学館友の会が高知を訪問した。今回の高知再訪も、こうした流れの一つにしたいと思ってきた。

講演会場には高校生の参加もあった。寅彦の出身校の高知追手前高校（旧高知県尋常中学校）の新聞部の生徒9名と教師3名が出席していた。講演の後、高校生と少しお話することができたが、ある生徒は「寅彦を大切な先輩と思ってきたが、講演を聞いて今まで知らなかった広がりがあった」と語ってくれた。講演で紹介した師弟2人の言葉でどれが好きかと尋ねると、女子生徒が「好きなもの苺コーヒー花美人ふところ手して宇宙見物」ですと答えてくれた。なるほど、これは現代の若い人にも共感がえられる言葉なのかもしれないと思った。後日、同校の新聞「追手前タイムズ」6号（2016.1.14）が届いた。1面に「寅彦と宇吉郎の師弟愛」と大きな見出しで、展覧会や講演会に関してまとめてあり、芥川が治宇二郎について書いた「一人の無名作家」が転載されていた（21頁に新聞を転載）。私が寅彦に継ぐ科学者が生まれることへの期待を述べた事を高校生たちは覚えていて、真摯に受けとめてくれた。寅彦や宇吉郎の魅力に触れた生徒たちに、良い影響が及ぶことを願いたい。

■ 実験の研修を兼ね、友の会の人達と交流（13日）

13日は午後の実験教室があるので、午前中その準備を寅彦記念館友の会と雪の科学館友の会の人達で、交流しながら進めた。実験教室と、その後日曜毎に開かれる「ミニ実験」の時に、学芸員と一緒に友の会の人達に実

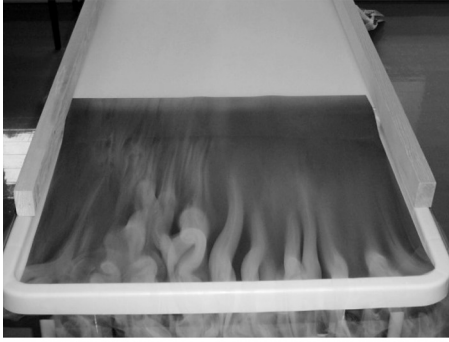


雪と氷のふしぎ実験

験を手伝っていただくための講習である。集まった人の中には20年来の旧知の友人も、新潟、姫路など遠くからの初対面の人もあり、なごやかなで楽しい会であった。

■ 雪・氷、「筋状の雲」の実験について

「雪と氷のふしぎ実験」として、雪の科学館でやっているいくつかの実験、氷のペンダント・チンダル像・氷のステンドグラス（偏光板を使用）・ダイヤモンドダストを紹介した。普段は見ることがない雪や氷の不思議に触れて楽しんでいただけたように思う。



「筋状の雲」の実験

もう一つ、寅彦の随筆「茶碗の湯」と関連させて、冬の日本海にできる「筋状の雲」の実験を行ったので少し補足する。寅彦は読者に茶碗の湯をよく観察することを奨め、茶碗の中の現象と地球上で起こるさまざまな現象を結びつける視点を示している。茶碗の湯の上部が冷え、上下で温度差ができると対流が発生する。味噌汁の表面にむらができるのはこのためだ。そして、山谷風、季節風など大きなスケールの現象の背景にも同じメカニズムがあると指摘している。そこで、冬の季節風で日本海にできる「筋状の雲」の実験を試みた。大陸からくる寒気の代わりにドライアイスにお湯を注いだとき発生する白い雲を使い、これがゆるやかな傾斜を下り、暖かい日本海に見立てたお湯を入れた浅いトレーの上を渡るとき、白と黒が交互した筋状の雲ができる状況を見てもらった。これは、お湯からの上昇気流で発生する対流の実験である。実際に筋状の雲が発生している時、日本海側の地域では、雨や雪が降ったり、晴れ間がのぞいたり、不安定に変化する。これは、上空の筋状の雲が揺れるように不安定に変化しているため、実験でも筋状の雲の揺れや変化が観察できる。

≪岩波ジュニア科学講座9『うずまく大気と海』(1984) 78~80頁参照。

実際には、上昇気流が起るところに雲が発生し、下降気流のところは晴れる。しかしこの実験では、熱い空気が上昇すると雲が消えて、逆の関係になる。雲が発生するのは、かなりの高さまで上昇して気圧が低下し、断熱膨張が起って冷えるからだ。それで、シリコンオイルなどを使って対流をもっと見やすくする実験や、断熱膨張で雲を作る実験も組み合わせると、より理解しやすくなると思う。≫

寅彦はアルミ粉を入れたアルコールで対流の実験を行い、顕微鏡で観察した。傾斜をつけると筋状になることも知っていた。寅彦が亡くなって25年後の1960年、アメリカの人工衛星タイロス1号が宇宙からの地球の映像を初めて送ってきた。その中に筋状の雲が写ったものがあり気象関係者の多くがアッと驚いたというが、寅彦が実験で知ったメカニズムが大スケールで再現されたのである。文学館ができる時、上田壽氏を中心に寅彦が行ったこの実験が再試され、映像化されて寺田寅彦記念室のビデオブースで見ることができる。

≪この時の「ビデオ製作裏話」が上田壽著『新・寺田寅彦断章』(2010 高知新聞社)にある。この本には文学館所蔵の宇吉郎から寅彦への手紙について詳しく検討した内容も含まれている。一般書店にはないが、文学館で購入できる。壽氏の遺族の上田偉(さかん)氏が講演会に出席され、初めてお会いできた。≫

■ 寅彦のお墓参りに参加

実験教室の後、友の会の人達と寅彦のお墓参りに出かけた。少し急な坂を登ったところに寺田家のお墓が並んでいる。お墓掃除をされている人達も来ていて、大勢になった。お墓には、花の他、苺と缶コーヒーが供えられた。寅彦の「好きなもの苺コーヒー花美人ふところ手して宇宙見



物」が、友の会の人達の心の中に生きているようだ。「美人」は、お参りに参加した女性達だ。お参りをした後、苺をお下げして皆で1個ずつ戴いた。甘くおいしい苺だった。翻って、宇吉郎のお墓には、お花の他何を供えれば喜ばれるだろう、などと考えた。

寅彦のお墓の左右の側面と裏の3面に小宮豊隆による墓誌がびっしり刻まれているが、苔で読みにくくなったところもある。没後80年が経ち、お墓の苔をどうすればよいのか、友の会の人達は考えあぐねている様子だった。せっかくの豊隆の墓誌なので、中身を印刷した掲示物を設置する方法も考えられるのでは、などと思った。

■ もう一つの没後80年記念展

13日の高知新聞に「寅彦と親友・竹崎音吉没後80年展」の記事が載った。高知市から少し離れた奈半利町で音吉の孫が開催した。旧制五高の時、寅彦が夏目漱石宅を初めて訪ねたのは、同郷の友人が落第にならないよう頼むためだったという。それが親友の音吉のことだそう。その訪問が、結果的に、寅彦と夏目漱石の師弟関係の絆が生まれる大事な機会となった。

2016年は人工雪誕生80年（3月12日）、治宇二郎没後80年（3月22日）の節目だが、漱石の没後100年（12月9日）でもある。東日本大震災から5年（3月11日）であるのも忘れられない。

■ 寺田寅彦記念館で（14日）

加賀へ帰る14日の午前、寺田寅彦記念館を訪ねた。庭の木や花が綺麗に手入れされていて、清々しかった。館には伊東喜代子さんが居られたので、いろいろ話をした。伊東さんは最近、友の会から『寺田寅彦先生と私 - 二十数年寺田寅彦記念館に勤務して -』を出版されたそうで、1冊戴いた。開くと、「寺田寅彦先生と〇〇」という22の題が並んでいる。記念館での寅彦の研究や諸記録を整理したノートやファイルも見せていただいたが、一人でよくやっておられるなと感心するばかりだった。私は雪の科学館に20年勤めたが、伊東さんはもっと長い。しかし、途中、家庭の事情で勤務を一時やめることになり、最近復帰できたとのことだ。人生のさまざまな波を超えて一つの大事な仕事を続けられている。このような人の存在は、人物記念館にとってとても大事なことだ。もう、20年前から知っている伊東さんだが、その研究ぶりに接して、改めてその真摯さに打たれた。そして、私の仕事の反省にもなり、励みにもなった。

《寺田寅彦記念館で500円で頒布》

記念館は友の会が指定管理を受けて運営しているとのことである。山本会長の奮闘ぶりも垣間見ることができた。良い高知再訪だったと満足している。

